

仮屋からみた春日若宮祭

一、儀礼と仮屋

春日若宮祭は、保延二年（一一三六）に当時の関白藤原忠通により始められたといわれている。この祭は興福寺が境内の御旅所に鎮守である春日若宮社の神霊を迎えて祀る儀礼であるが、「おん祭」の名称で呼ばれ、大和国の大祭として行なわれてきた。また御旅所祭において奉納される芸能は古態を伝えるものとして有名で、今までに多くの研究が行なわれている。

さて若宮祭では御旅所を中心に、臨時の施設である仮屋が造られてきた。本稿ではそれらの中で祭祀に直接関わる仮屋を取り上げ、祭祀上での位置づけをしてみたい。なお、神霊を祀る仮屋を「御仮屋」と呼んで区別する。

まずこの祭の概要と、祭祀に関わる仮屋について紹介しよう。^①

一二月一五日の夕方、願主人の参籠所である大宿所で祭の無事執行を祈願する大宿所祭が行なわれる。巫女により湯立神楽も演じられる。



図1 大宿所での湯立神楽

翌日、若宮社で宵宮祭が行なわれた後、一七日午前〇時すぎに遷幸の儀が執行される。警蹕の中、榊の枝で何重にも囲まれた若宮社の神霊が春日野の御旅所に建てられた御仮屋に遷る。御仮屋に御神体が納められて灯籠に火が点じられ、御仮屋前の一対の盛砂に松の枝が挿し込まれる。

森 隆 男



図4 御旅所の御仮屋
 (『春日大宮若宮御祭礼図』)

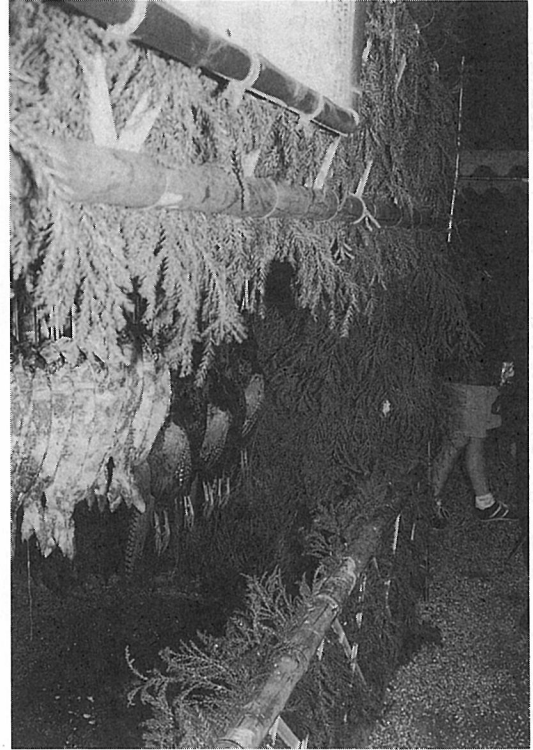


図2 大宿所の鳥掛部屋



図3 祭礼当日の御仮屋

享保一五年（一七三〇）に完成した『春日大宮若宮御祭礼図』（以下『若宮祭礼図』と略す）に所収されている図にも盛砂が描かれ、「一、御殿御移り御燈籠を釣る祢宜役 一、御神前二行ニ立砂植松沙汰之」と記されている^②。この松の枝は神霊が御仮屋に遷った象徴といわれている。遷幸の後に撤去されており、神霊が御仮屋に滞在していることを表示する役割を果たしている^③。

遷幸の儀に引き続き暁祭が執行され、旧祢宜の大宮家から神饌が献じられる。午後からは芸能集団や祭の参加者が御旅所の神霊に参る「お渡り式」が行なわれる。行列の中心となるのは日使と馬長児である。日使は藤原忠通の代理として社参したことに由来するといわれ、関白の格式を表わす衣装をつける。馬長児は山鳥の尾を頂きに立てた笠をかぶり、背中に牡丹の造花を付けた騎馬の少年である。

御旅所に到着後、御旅所祭が行なわれ、夕方からは御旅所の斎庭において神楽や東遊、田楽、細男の舞などの古典芸能が奉納される。そして、同日午後一時に遷幸の儀が執行され遷幸の儀と同様の作法の中で、神霊が本社に戻る。翌一八日は後宴で相撲や能が演じられる。

御旅所では御仮屋に神霊を祀ることになる。神霊の滞在は一日に満たないが、御仮屋は一〇月一日の縄棟祭の後、後述するように多くの人手と材料を費やして建てられてきた。この御仮屋は歴史的な情報が伴った貴重な事例である。伝承されている頭屋儀礼の御仮屋についてはほとんど史料が残っていないが、若宮祭の御仮屋には平安末期以来建てられてきたことに加えて、関連する史料が存在するからである。

また祭儀に参加する願主人が物忌の生活を送る施設として大宿所が用

意された。大宿所では神饌の準備や御旅所の舗設も担当することから、頭屋に相当するといえる。大宿所は常設の建物であるが、祭の期間のみ使用される仮屋の性格を持っている。

さらに大宿所の庭には願主人が神饌として奉納した鳥獣を納める「鳥掛部屋」が建てられる。これも屋根と壁を杉葉で葺いた仮屋である。

二、御仮屋の形態及び材料

御仮屋は春日造で、形態と規模は若宮社の本殿とほぼ一致する。間口約三メートル、奥行約二・五メートルの身舎と、その前に縁と階がつく。材料についてみると柱や高欄は松の黒木が使用され、屋根は杉葉のついた枝を立てた状態で葺かれている。庇の部分も杉葉葺だが松を横にしているので、約一〇センチの厚さになっている。正面を除く三面の壁は土壁で塞がれている。正面床下も土壁である。それらの壁には一面につき一八個の白い三角印がつけられている。破風や正面床下にもこの三角印が見られる。さらに御仮屋入口の上部にモミの枝一本が取りつけられている^④。大変興味深いのが、これが何を意味するかは不明である。

さて『若宮祭礼図』の中に「御旅所奉幣并切埒之図」として御仮屋の様子を描いた絵があり、現在見られる御仮屋と形態、材料とも同じである。細部に留め金具が使用されている点を除けば、御仮屋は近世中期以降の変化は認められないといえる。近世以前の御仮屋についてはどのよう考えるべきだろうか。戦国時代には祭礼自体がかなり荒廃したと思われ、豊臣秀長により復興が図られている。徳川家康も祭礼の維持につ

とめ、御仮屋の料木の供出を大和国内の天領に命じた。このような歴史を経た若宮祭だが、永島福太郎は御仮屋そのものには創始以来、全く変更がなかったと主張している。^⑧

一方、折口信夫は御仮屋が当初のものであることに否定的な見方をした。その理由として「御旅所古図をみるといまだいぶ様子が異なっている。いまではいささかの余地のない仮宮の後方に仮屋が三つもできる」とし、御旅所の場所を含め、変化があったとみている。折口のいう「御旅所古図」とは、鎌倉末期から南北朝にかけて若宮社の神職をつとめた中臣祐臣が記した『若宮祭礼記』に所収されている図を指すものと思われる。これは、若宮祭が始まった保延二年当初の御仮屋の鋪設図である。ただし、それによると御仮屋の後方に設けられる仮屋は二棟で、御供の備進所と巫の控所である。立地は現在の御仮屋を取りまく状況とは異なるが、この点を御仮屋の形態の変化と結びつけることには疑問が残る。

まず、御仮屋の形態について検討しよう。神社の社殿は形式が固定する点が大きな特徴であるとの指摘がある。^⑨現在の春日社や若宮社の社殿は文久三年（一八六三）に造り替えられたものであるが、春日社にはかつて伊勢神宮と同様、二〇年に一度社殿を造り替える慣例があり形態等は踏襲された。若宮社の本殿は高欄の一部を除いて春日社の本殿と形態規模ともほとんど同じである。春日社の本殿は平安末期までは現在の形態を遡ることができる^⑩とされており、若宮社の本殿も同様であろう。若宮祭は若宮社創建の翌年から始まったが、その際、御旅所の御仮屋の形態は若宮社の本殿を倣ったと思われる。すなわち御仮屋の形態について

は若宮祭の創始当初と同様であったとみていいだろう。

次に御仮屋の材料について検討したい。折口は能の鏡板の松と関連させて「昔はここに松の木があり、そこにお旅所を作って祀ったのである。だから御殿より松が主体となる。こう考えたらどうか。それが残って松の荒木のままで仮宮を作るとみればよい」と述べている。^⑪しかし、松の黒木と松葉で御仮屋を造ることは、仮設を象徴するという重要な意味がある。『若宮祭礼記』の御仮屋の図に「御寶殿、黒木松葉葺、御簾懸奉也、懸見給御鏡三、鈴三相具、御内、松六〇板敷之、以唐庇布緹、御内壁代清簾御引廻、同棧敷荒薦鋪光也」と記載されている。形態について具体的な記述はないが、黒木の柱に松葉葺の屋根が当初から採用されていたほか、六分の厚さの板を床板に使用していたらしいことも知ることができる。弘安六年（一二八三）には臨時祭が執行され、その際も御旅所に御仮屋が建てられた。その時の記録の写からも黒木の柱に松葉葺の屋根であったことがわかる。

藤原重雄は『春日権現験記絵』に描かれた「仮屋」について興味深い考察をしている。その中で、古代末から中世にかけて院や貴族が神社へ参詣する際に、宿泊や休息のために建てられる「仮屋」には松葉葺の建物が用いられたことを、いくつかの事例とともに紹介している。^⑫つまり松葉で葺いた仮屋は、当時珍しいものではなかったのである。南都の事例としては、文治元年（一一八五）に再興された東大寺大仏の開眼供養の際、後白河院の仮屋がやはり松葉葺であったとの指摘がある。^⑬大仏の開眼供養より半世紀前に始まった若宮祭において松葉葺の御仮屋が建てられたことも、とくに若宮社に限った特別な理由を求める必要はなから

う。天平勝宝八歳（七五六）の年号をもつ『東大寺山堺四至図』には、春日社から興福寺にかけての一带に松が描き込まれている。古くから松の植生があり、入手しやすい木であったともいえる。

『若宮祭礼記』には壁についての記述はみられないが、若宮祭が始まって以来、御仮屋の材料についても変わることがなかったと思われる。しかし、壁材が土である点は検討を要する。柱と屋根が仮設を表示するものであったのに対し、土壁はそれに反するからである。

高取正男は、平安時代初期に神道が仏教に対抗して諸々の形式を整備していくと指摘した^⑩。建築についてみると、寺院の瓦屋根と土壁に対して神社は檜皮葺屋根と板壁を採用したといわれている。保延二年当時、神社の、しかも御仮屋が土壁であったことは異例のことであったと思われる。三面の壁を土壁とする構造は寝殿造にみられる塗籠とも共通する。すなわち司祭者が参籠するための機能をもった施設であった可能性がある。『若宮祭礼記』に記された床板の厚さもこのことと矛盾するものではない。

三、御仮屋の造営に要する労力

これだけの規模を持つ御仮屋を建てるためには、どの程度の労力と日数が必要とするのだろうか。『若宮祭礼図』によると九月一日に地鎮祭に相当する繩棟神事が執行され、一月二日から御仮屋の造作が始まる。しかしこの史料にはこれ以上の記述はない。幸い、天理図書館が所蔵する正徳元年（一七一二）の「大宿所日帳」が翻刻されている。この

史料については、大宿所の賄いを担当した町代が記した大宿所の運営記録であると紹介されている^⑪。

まず「大宿所日帳」から御旅所造営のために手配した人足の人数を書き出すと、二二日一〇人、二二日一五人、二三日二〇人、二四日二五人、二五日三〇人、二六日三五人、そして祭礼当日の二七日は一〇人、二八日一〇人、二九日一〇人となる。また二五日は御仮屋と東西の「仮屋」の屋根葺が行なわれ、屋根葺職人四人が雇われている。大宿所の庭には一月二三日に「鳥掛部屋」が造られ、その屋根や壁を葺いたのも同じ屋根葺職人である。

二五日に屋根葺が行なわれたとすると、その日までに要した人足は延一〇〇人となる。このうち何人かは御旅所内の東西に建てられる神職や楽人のための「仮屋」の造作等に当たったとしても、かなりの人手を要したことになる。この中には、大工や壁を塗る左官等は含まれていない。御仮屋と「仮屋」の材料である松の料木一七二〇本は、大和国一五郡のうち吉野郡を除く一四郡から、松葉や壁土も天領から納められた。このように御仮屋は臨時の建物ではあるが、多くの労力と日数を費して建てられていることがわかる。

四、御旅所と大宿所

御旅所は若宮神社の西方一キロメートルに位置する。ここは興福寺の境内地の東端にあたる。御旅所のさらに西方約一キロメートルの所に大宿所がある。現在の大宿所は餅飯殿町にあり、豊臣秀長が南都奉行に命

じて造らせたものである。中世の大宿所については福原敏男が『大乘院寺社雑事記』文明九年（一四七七）の条等から、現在の大宿所の位置にあった遍照院の他に、角振町にあった三条堂、小西町にあった元林院の計三か所があったことを明らかにした^⑧。これらはいずれも興福寺の西または南西に隣接する地である。三か所に分かれていたのは、所属する武士団が異なる願主人が三人いたことによるという。このうち遍照院については、弘安六年（一二八三）の臨時祭の際すでに大宿所とされている^⑨。

次に福原の研究から大宿所において行なわれた中世の主な行事をみておこう。九月一七日を祭礼当日としていた至徳元年（一三八四）に原本が成立した『長川流鏑馬日記』によると九月八・九日に祭礼用品が大宿所に運び込まれる。翌一〇日に願主人が竜田で塩垢離をかき、精進屋に入る。一二・一三日に雉子などの懸物が運び込まれる。一五日には地下の神子による湯立が行なわれる。またこの日は大宿所の間を精進屋とし、注連を張る。一六日は夜宮参り。そして一七日に馬場で流鏑馬が行なわれる。応永末年（一四二八）に祭礼が一月二七日に変更となった。その後についても、一五世紀中頃から後半にかけて成立したとされる『若宮会目録序』から行事が抜粋されているが、行事の内容に大きな変更はないようである。

近世の大宿所に関わる行事については、前出の正徳元年の「大宿所日帳」に詳しい。これによると一〇月二十九日に願主人が大宿所に行き、翌三〇日の晦日に竜田へ塩垢離に行く。十一月二日、願主人が大宿所内の小精進部屋に入る。この日から御旅所造営のため人足を派遣したことは前述の通りである。二四日には神饌の「献菓子」の準備が始まる。

二五日には二日前に造った鳥掛部屋に雉子などを懸ける。具足や武器を飾るのもこの日である。また神子による湯立がある。この時の様子は『祭礼図』に「御湯図」として描かれている。二六日は宵宮で雉子や兎狸などの神饌の一部を若宮本社へ備進する。そして二七日の祭礼当日を迎える。この日の渡御行列の人足も大宿所の町代が揃えたという。二八日から二九日にかけては、懸物の配分などの後始末が行なわれている。

なお鳥掛部屋には雉子二〇〇余羽、兎一三六羽、狸一四三匹、その他鯛などが神饌として懸けられる^⑩。このような神饌の供え方は古態を伝えていると思われる。鳥掛部屋は大宿所の歴史とともに中世まで遡る。「献菓子」は餅やみかんを使用して装飾した二メートルを越す大型の神饌である。竹串で土台に固定する点など、奈良県下の頭屋儀礼で見られる神饌と共通する部分認められる。

これまでの検討から大宿所とは、願主人が物忌の生活を送るとともに、神饌の手配を行ない、さらに御飯屋の造作など祭礼の準備をすすめる施設であることがわかる。原田敏明は大宿所と御旅所の共通性を指摘したが^⑪、むしろ氏神祭祀における頭屋の機能と共通するといえる。

さて留意したいのは神饌を供する鳥掛部屋が造られながら、大宿所には神を迎える機能がないことである。雉子や兎などの神饌の一部は前出のように宵宮に当る祭礼の前日、神幸前の若宮社本殿に供される。御旅所へ神幸する前の神霊に、祭礼のための神饌を供することは不合理であろう。

五、仮屋からみた祭祀形態

以上のように仮屋の検討からみた若宮祭の祭祀形態は、精進屋で物忌の生活を送った願主人、すなわち頭人が御旅所に建てられた御仮屋に迎えた神霊を祀るものといえる。奈良県下の氏神祭祀にみられる頭屋儀礼では頭屋の庭に御仮屋が建てられる場合が多いが、若宮祭も基本的には頭屋儀礼と同様の祭祀形態とみることができるとは、しかし伝承事例の中に土壁の御仮屋は見当らない。御仮屋の土壁と懸鳥部屋の位置についての疑問はどのように理解すべきだろうか。私は、ここに若宮祭創始以前の祭の歴史が残存していると考ええる。

黒田一充は春日社の本殿が南向きであるのに対し若宮社の本殿が西向きであることに着目し、若宮社こそ春日社創始以前から鎮座していた地主神であると指摘した^⑧。黒田が論じたように、藤原氏の氏神がこの地に祀られる以前に、御蓋山を神奈備として信仰する先住の人々が現在の御旅所付近に住み、そこに神霊を迎えて祀る祭祀が行なわれていたことは十分に考えられる。祭祀の主体が興福寺に移ることにより、頭人の精進屋と神饌等の準備をする機能を持った大宿所が御旅所から離れた所に設けられた。その結果、神霊が訪れることのない大宿所に神饌を供する鳥掛部屋が造られるという不合理な状況を呈するに至ったのではないだろうか。鳥掛部屋の神饌の一部が祭礼前日に若宮社本殿に供されることも、このような状況になって生じたと思われる。

また土壁で造られる御仮屋は、前述したように籠りの場であった可能

性があり、神霊を祀るだけでなく頭人が神霊と同居して物忌の生活を送る精進屋の機能も持っていたことが考えられる。このような祭祀形態は、大宿所を設ける若宮祭とは根本的に異なる。

いずれにしても仮屋から若宮祭をみた時、この祭の創始に先行する祭祀の存在をうかがうことができよう。

【註】

① 『国指定重要無形民俗文化財 春日若宮おん祭』（春日若宮おん祭保存会発行 一九九六）を参照

② 『春日大宮若宮御祭礼図』『神道大系』神社編 春日 三五九頁 一九八五

③ 延宝八年（一六八〇）の一連の注進文を写したものとされる『春日社年中行事』には、同じ儀礼の部分が「御正軀鎮後之後……（中略）次燭御前燈籠、次殖松於庭上之四方」と記されている（『春日社年中行事』『神道大系』神社編 春日 二六一頁 一九八五）。「庭上」とは、神事や芸能が奉納される御仮屋前の芝生の庭を指すと思われる。この四方に松の枝を挿す行為には、祭場に神霊を迎えるという神迎えの古い作法が伝承されている。

④ 春日大社名譽参事 大東延和氏ご教示

⑤ 前掲② 三七八―三七九頁

⑥ 永島福太郎『祈りの舞』一一頁 一九九一

⑦ 『春日若宮御祭り』『折口信夫全集』ノート編 第五卷 五〇三頁 一九七一

⑧ 『若宮祭礼記』『神道大系』神社編 春日 四三九頁 一九八五

- ⑨ 文化庁監修『国宝』一五 建造物Ⅲ 一四一頁 一九八四
- ⑩ 前掲⑨ 一六九～一七〇頁
- ⑪ 前掲⑦ 五〇五頁
- ⑫ 「弘安六年臨時祭記写」『神道大系』神社編 春日 四六八頁 一九八五
- ⑬ 藤原重雄「『仮屋』小考」藤原良章他編『絵巻に中世を読む』一二六～一二〇頁 一九九五
- ⑭ 前掲⑬ 一一八頁
- ⑮ 福山敏男『日本建築史の研究』一九八〇 七頁に模写図
- ⑯ 高取正男『神道の成立』一九七九
- ⑰ 中牧弘允「神社と神道」『日本民俗文化大系4』二六五頁 一九八三
- ⑱ 幡鎌一弘「天理図書館所蔵正徳元年『大宿所日帳』——近世春日若宮祭礼の一記録」『ヒブリア』第一〇五号 一九九六
- ⑲ 福原敏男『祭礼文化史の研究』三九六頁 一九九五
- ⑳ 前掲⑲
- ㉑ 前掲⑲
- ㉒ 前掲② 三三八頁
- ㉓ 原田敏明『宗教と生活』二七八頁 一九七七
- ㉔ 黒田一充「春日若宮社の創始」『古代史の研究』第五号 関西大学古代史研究会 一九八三